2022/2/5
（オマケの「日本語教室」自覚なき日本語の重圧）書庫版

我々が普段使い慣れている言語、日本語が「精緻さ」という点で如何に優れた言語であり、逆にそれを新たに学ぶ外国人の立場に立ってみれば、如何に難しい言語であるかを我々日本人はもっと「自覚する必要」がある様な気がしております。
一例を上げれば我々が何気なく使い分けている
漢字、カタカナ、平仮名の区別。
そして漢字を当用漢字 1600 としてカウントし、それだけに限っても三種類の合計が凡そ 1700 にもなる現実。つまり英語のアルファベットなら 26 文字覚えれば済む処を基本語ですら優に 1000 を超えているという事。
そして特に同じ漢字でも音読み、訓読みなど読み方の違いがあり、尚且つ外国語では余り数の多くないチラリ、ズンズン、ピッカピカ等の擬音表現が山程ある事実。
数字でも一つ、二つ、三つの他にひぃ、ふう、みい、や単純に一、二、三の使い分け。
後ろで修飾される物によって、お皿なら一枚、二枚と「枚」だったり、物干し竿だったら一竿、二竿と「竿」になったりと矢鱈と細かい数え方の変化。
敬語でも尊敬語、謙譲語、丁寧語の違い
男言葉と女言葉の使い分け。
外国人が日本語を学ぶにあたって
現在形、過去形、未来形と未然、連用、終止、連体、仮定、命令形以外に上述の様な事を学ばなくてはならない、その」「上述部分」の負荷の気の遠くなる様な重みに我々は気づいていない様な気がします。
「日本に来たんだから、日本語を喋れ。喋らないのは失礼だ」
というご意見も分からなくはないのですが、相手をおもんぱかる気持ちがあるなら、その相手の苦労を察するのも我々には必要な気も致します。
兎に角日本語というのは縦横斜めにマトリクスを組んでチェックを入れるが如く非常に細

分化された言語です。
そしてその使い方をちょっとでも誤ると
「KY（空気読めない)」だの「口の利き方を知らん奴だ」だのと叩かれる。
逆に申せば、それらが
「分断」「囲い込み」「分断と囲い込みの固定化」即ち「村社会」と「村八分」意識を醸成している様な側面もありそうです。
それを簡単に一言で申せば「強固な同調強要社会」の元となっている様な。
そしてその元にあるのが古代より我が国文化の中で受け継がれてきた「微に入り際に渡っての飽くなき様式美（矛盾なき前後左右上下、縦横斜めの整合一致性）の追求」からである様な気も致しております。
要するに極めて強固な枠組み。まずは先に「型ありき」「型から入る」そして型の代名詞でもある「肩書（何々をする）の動詞はなく（何々である）の名詞重用)」社会。
であるとすれば我が国国民が優れた言語である反面、同じ言語の上述の如き悪しき副作用から醸成される「一致団結」「全員一丸となって」等の「金太郎飴」「心理的鎖国状態」から解き放たれるにはその辺の日本語の成り立ちと日本人の気質、価値観、美意識から紐解いていく必要がある様に最近思い始めております。
大変ですが。